

事例レポート



特集
どうやって
授業をつくる？

担任の先生が中心になって、英語の授業づくりを進めている学校取材しました。
どのような研修・準備を行っているのか、実際の授業風景とともにご紹介します。



事例1 宮城県七ヶ浜町立

えき らく

亦楽小学校

授業を常にオープンにし、町の教育者全員で高め合う

担任とALTが あうんの呼吸で進める45分

宮城県七ヶ浜町立亦楽小学校の5年生の教室に入ると、コの字型に並べられた席についた子どもたちが元気な挨拶で迎えてくれた。教壇に立っていたのは、ALTのEduardo Urbina先生。担任の外山友^{とやまゆう}先生の姿を探すと、教室の端に立ち、子どもたちと一緒に授業を受けているかのように見える。この日学ぶのは、曜日と教科の

言い方。エディ先生がピクチャーカードをうまく使いながら、明るくテンポよく英語での言い方を確認していく。

10分が経過したころ、「よし、ここでミッシングゲームに入ろうか」と外山先生がエディ先生に声をかけた。続けて、「ミッシングゲーム覚えてる？」と子どもたちに尋ねると、「何がなくなっただ探すんだよね？」という声が上がった。「そうそう」と外山先生が答えると、子どもたち



授業を進行するALTのエディ先生(中央)と、クラス全体の様子を見守る担任の外山先生(右)。

は安心した様子でゲームを楽しみはじめた。

「OK。みんな、筆記用具を出して」。ゲーム後、外山先生はプリントを配ると、黒板の前でエディ先生の横に並んだ。ここからは、「夢の宿題をみんなで作ろう」と題した活動で、宿題がいちばん必要だと思う教科とその理由を各自で考える。そして、意見を述べ合った後、クラス全体で1週間の宿題計画を作るというものだ。少し複雑な指示は外山先生が日本語で行うが、「OK, next.」「Good job.」といった簡単な声かけや、発話モデルはエディ先生が示す。まさにあうんの呼吸で授業が進み、あっという間に45分が終わった。

担任はALTの授業をマネジメントする存在

「中盤、指示が複雑になってきたところから私が主導権を握りました。子どもとエディと一緒に見える位置に立って、子どもたちの理解が追いつけないと思ったら、ここだ、というところに入り、日本語でフォローする。毎回だいたい同じくらいのタイミングですね」(外山先生)。事前準備について聞くと、通常は放課後にエディ先生と打ち合わせの時間を設けるが、今回は十分な時間が取れず、直前にエディ先生に授業の流れを書いた紙を見せて確認してもらった程度だという。



子どもたちに発話モデルを示す、エディ先生と外山先生。



授業中はできるだけ多くの友達と会話をさせる。

「年度当初と比べ、ALTの指導力が育ってきて、細かく話をしなくても授業がうまく進むようになりました。子どもたちものってきて、楽しそうに活動しています。自分は決して英語が得意ではないですが、そんなエディや子どもたちの様子を見て、少しずつ不安が払拭されてきました」。

実はこの授業、「外国語活動」ではなく、町教育委員会が独自に行う「英語コミュニケーション」の授業だ。七ヶ浜町内の三つの小学校が文部科学省から教育課程特例校の指定を受け、1・2年生は20時間、3・4年生は35時間、5・6年生は「外国語活動」の35時間(平成30年度からは50時間)を「英語コミュニケーション」の授業に充てている。これに伴い、ALTも増員。ALTをT1、クラス担任の日本人教師をT2と位置づけ、「T2はT1の授業をマネジメントする役割。町の教師全員でALTを育てる」というのが七ヶ浜流だ。

「ALTは教育を専門に学んでいない場合が多く、指導力に差があるうえ、契約も短期間であることから、年度による差も出てしまいます。それを一定レベルに引き上げたいのです。ALTを新任の教師だと思って、各学校で育てながら授業を行うように意識してもらっています」と、亦楽小学校校長の須藤清先生は言う。

町長からクラス担任まで 一体となって取り組む

七ヶ浜町は仙台市街から車でおよそ30分、宮城県中部の太平洋沿岸に位置する風光明媚な町だ。東日本大震災で甚大な被害を受けており、津波により町の面積の約3分の1が浸水した。人口はなだらかに減少を続け、少子高齢化が進む。亦楽小学校の児童数をみても、この15年ほどで2分の1にまで減っている。そんな中、現・寺澤薫町長が、マニフェストにグローバル人材の育成を掲げた。

「震災からの復興を考えたときに、町では子どもに目を向けました。町の未来を子どもの成長に託したのです」(須藤校長)。グローバル人材づくりには英語コミュニケーション能力は必須と考えた町長が発案し、武田光彦教育長率いる教育委員会が企画・立案し、町内五つの小・中学校で具現化したのが「七ヶ浜グローバルPROJECT」だ。須藤校長も推進メンバーとして一翼を担う。そのプロジェクトの主要事業として、教育委員会を中心に町内の小学校3校と中学校2校が同じコンセプト「英語コミュニケーション」の授業を実践している。各校の推進委員の先生を中心に、頻繁な情報交換や授業参観が行われており、共に学び合う緊密な連携体制ができている。そして平成29年度から平成38年度まで、10年間の長期計画であることも特徴的だ。成果を急がない、教育委員会の決定は、現場の先生に大きな安心感を与えた。

「百聞は一見に如かず」 教師全員が先行例を視察

七ヶ浜町の「英語コミュニケーション」には、モデルとなっている先行例がある。岩手県金ヶ崎町立金ヶ崎小学校の英語の授業だ。プロジェ

亦楽小の授業づくりの ポイント



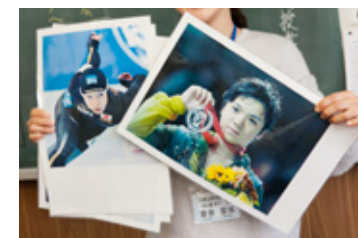
放課後、ALTと打ち合わせを行い、どんなアクティビティを入れるか、ポイントになるところを明確にする。



高学年では「インフォメーション・ギャップ」をつくるように意識。伝えたい、話したいという思いを刺激する。



低学年では、失敗を恐れずとにかく話すことを意識させる。クラス担任は、子どもたちにしっかりと寄り添う。



季節のイベントや時事ニュースもふんだんに取り入れる。おもしろいネタは、教師どうしてまねし合うことも。



クト企画段階の視察で、これが町の目ざす授業だと確信した武田教育長は思い切った決断をする。「百聞は一見に如かず。これを七ヶ浜の先生たちに見てもらおう」と100キロ以上離れた岩手県金ケ崎町まで、小中学校の全教員を視察研修に派遣したのだ。「今振り返るとこれ自体がいわばアクティブ・ラーニングですね。教師全員が方向性を共有したことで、“やらされ感”がなくなったのだと思います」と須藤校長は言う。

町役場担当職員も交え総勢130人による視察ツアーは、5回に分けて行われた。参加した先生が記した感想を見ると、ジェスチャーや絵を活用する効果、かけ声、安心して学べる学級づくりの重要性、テンポのいい発声練習や活動の

組み立て方への関心などとともに、それらを具体的にどう授業に生かしたいかというコメントが並ぶ。外山先生も視察を振り返り、「優秀なALTの姿も印象的でしたが、何よりも子どもたちの姿が目をはきしました。楽しそうによく動いていて、英語への関わり方も素晴らしかった。あの視察で受けたインパクトは大きく、今もあの当時の授業がイメージとして頭に残っていて、日々の授業のモデルになっています」と話す。

いつでも、誰に対しても授業をオープンにする

視察研修後には、各校で模擬授業と授業見学を繰り返した。さらに各校とも、「自由に見学に来てください」と、保護者、地域住民にも授業を公開しているという。これには抵抗をもつ先生



「明るく、楽しく、おもしろく」が七ヶ浜町の目ざす姿。

も多いのではないかと、外山先生に尋ねると、「教員は教室を開いたほうが変われるので、意識して見られるようにしています」と事もなげに言う。

結果、亦楽小学校では、先生方が互いの授業を見学し合い、互いにまねをし合ったり、疑問や悩みを解決し合うことは日常として定着している。同校の英語コミュニケーション推進委員を務める^{とろしゃさとみ}當舎聖美先生によると、うまくいった活動の共有以上に失敗例の共有機会が多く、子どもにとって有益でないと判断した活動は、やめる決断を下すことも多いそうだ。

「校長からも教育長からも、カリキュラムは仮のものだから、現場優先でどんどん変えていいと言われます。一緒になってやっていこうと思えるのは、主体的に進められる裁量の大きさがあるからに他なりません」。

英語嫌いをなくすことが最大の目標

そんな中で、先生たちに唯一求められる視点がある。それは、「明るく、楽しく、おもしろく」ということだ。先生どうして授業見学を行ううえでも、必ず「明るく楽しくおもしろい授業だったか？」という問いを投げかけ合う。このような授業を行うことは、「七ヶ浜グローバルPROJECT」の目標である「英語嫌いを出さない」を達成するために大切なことだからだ。

果たして今、1年間の学習を終えた子どもたちに「『英語コミュニケーション』の授業は楽しいか」というアンケートを取ったところ、「楽しい」の回答が91%にのぼった。

「残りの9%、『楽しくない』と答えた児童に理由を聞いてみると『私は英語を書きたい』とか『いつものALTだけでなく、違うネイティブと話がしたい』というものでした。中学校での学習につながるいい形ができてきていると感じます」と、當舎先生は言う。また、「授業を見た親御さんたちからも『私もこういう入り口から英語に触れていたら、英語が嫌いにならなかったのに』という声をよく聞きます」と話す。「中学の先生方にお話を聞くと、書くところでつまずいて苦手意識をもってしまう生徒が多いといえます。そのときに、英語そのものを嫌いにならないためには、小学校のうちに『つたない英語であっても、伝えたい気持ちが大きければ伝わるんだ!』という経験をしておくことが大事だと感じます」。

「英語のハードルを下げ、英語嫌いをなくす」。教育行政のトップから各クラス担任まで、皆が同じ目標を見据え、思いを一つに取り組む様子に、教育の原点を見る思いがした。

「英語に限りませんが、やらされている感、やらなければいけない感が先行するとうまくいかなくなります。英語が苦手でも、できないなりに何ができるかを考えることで、必ず得られるものがある。私の場合、まず私自身が英語に関心をもてたことが最大の成果です(笑)。まずは先生自身が英語を楽しむこと。それが子どもたちに伝われば、一つの成果ではないでしょうか(外山先生)。



特集
どうやって
授業をつくる?

授業の流れ



1. How are youタイム

“How are you?” “I’m ○○”という会話の練習。子どもたちは教室内を自由に歩きまわり、ランダムにペアを作りながら、合計5人とその日の調子を探ね合う練習をする。



2. ミッシングゲーム

はじめに、曜日と教科を表すピクチャーカードを黒板に掲示する。子どもたちが机に伏せている間、黒板からカードを1枚外し、何がなくなったかを答えるゲーム。



3. 自分の意見を言う練習

「宿題がいちばん必要だと思う教科は？」という問いに、それぞれが答える。“I study P.E. because 大人になってから体が鈍るから(理由は日本語使用).”の要領で発表。



4. ペアワーク

教室内を自由に歩きまわり、ランダムにペアを作りながら意見を言い合う。1コマの授業の中で、歩く・座る・立つなどを繰り返すことで子どもたちを飽きさせない。



5. 時間割をつくる活動

子どもたちが選んだ教科のピクチャーカードを担当がピックアップする。人数の多かった教科から順に並べ、日曜日から土曜日までの「夢の宿題」を完成させる。



6. 振り返り

4項目(いろいろな友達に考えや気持ちを伝えた・積極的に英語を使って友達とかかわった・いろいろな友達の考えや気持ちを聞いた・英語に慣れた)のチャートで自己採点。